常に諸子の先頭に在り―陸軍中將栗林忠道と硫黄島戰―

第一章　忘れられた栗林中将

アメリカを象徴する硫黄島記念碑　2

日米いづれ劣らぬ勇敢極る獻身　5

忘れ去られた栗林中將　9

時世の在り様で變る行動　14

事大打ちこはし思想と積極的健忘症　17

日本人は「ゴム人形」21

南部人フォークナーの言葉　24

人間に關する普遍的眞實　27

自己批判こそ道德的　31

美德の寶庫、大いなる口實　34

眞實を追ふ狩人の傳統　37

勝者も敗者も哀れな裸の二足獸　41

忘れてならぬ敗者の見事　44

アメリカを象徴する硫黄島記念碑

アメリカの首都ワシントンを貫き流れるポトマック川に臨んで、故ケネディ大統領の眠るアーリントン墓地がある。一八六四年、南北戰爭の戰死者を埋葬する國立墓地として開設されて以來、ここは「アメリカの理想と自由」のために貢獻した先人を偲ぶ「至高の聖地」となつてゐると案内書には記されてゐる。毎年四百萬人以上が訪れるとの事だが、十數年前の晩秋、私もこの廣大な墓地を訪れ、とりわけ「無名戰士の墓」に強烈な印象を受けた。兩次の世界大戰、朝鮮戰爭、及びヴェトナム戰爭における身許不明の戰死者が埋葬されてゐるのだが、私が訪れた時も多くのアメリカ人が墓碑の周邊に集つてゐた。その光景をヴィデオ・カメラで撮つてゐたら、衞兵交代の時間になつて、長身の人士官が現れて交代式の開始を告げ、墓の持つ特別の意味合について大聲で説明を始めると、まはりにゐたアメリカ人が揃つて姿勢を正したから、私はいささか慌て、氣樂に操作してゐたカメラの始末に戸惑つた。

「優れてアメリカを象徴する」と云はれるこの墓は二六時中警護され、傳統あるアメリカ陸軍第三歩兵聯隊の選り抜きの兵士がその任に當るが、衞兵に選ばれるのは大變な名譽で

あり、選ばれた兵士には數箇月に及ぶ嚴しい訓練が課せられる。警護は嚴格な禮式に則つて行はれ、衞兵が墓碑の前を歩く歩數は二十一歩と定められてゐて、ライフルを右肩に擔ひ正確にその歩數だけ歩み、墓碑の方向へ身體を向け、二十一秒間停止し、再び元の方向へ向つて歩き出す。軍人に與へられる最高の名譽たる二十一發の禮砲に對應した禮式である。

その「無名戰士の墓」を後にして、アーリントンの北側にまはると、ポトマック川や首都の中心部が觀望出來る見はらしの良い高臺があつて、そこに巨大なブロンズ製の彫像が立つてゐる。「無名戰士の墓」に劣らず、いや寧ろ(むし)それ以上に、アメリカ人氣質を象徵する高さ二十五メートルにも及ぶ記念碑で、五名の海兵隊員と一名の水兵とが強風にはためく大きな星條旗を押し立てんとして力を合はせてゐる姿が象(かたど)られてをり、この極めて迫力ある彫像こそ、日本とも淺からぬ因緣のある、アメリカ海兵隊の戰爭記念碑、いはゆる「硫黃島記念碑」なのである。

昭和二十年二月、小笠原兵團の栗林忠道(くりばやしただみち)中將以下二萬一千の日本軍守備隊は、東京から千二百五十キロ南方の太平洋上に浮ぶ孤島、硫黃島の地下要塞に立てこもつて、敵の襲來を待ちかまへてゐた。二月十六日、アメリカの攻略部隊が島を完全に包圍した。陸海合は

せて總數二十五萬、上陸部隊だけでも海兵隊三箇師團七萬五千といふ大軍である。三日間に及ぶ海空からの猛烈な砲爆擊の後、海兵隊が上陸し、四日間に亙る激鬪のすゑ、二月二十三日、島の西端に聳える要衝擂鉢山(すりばちやま)をアメリカ軍が占據し、山頂に星條旗がひるがへつた。戰前からの日本の領土に初めてアメリカ國旗が掲げられた瞬間であり、海兵隊はその誇りと感動とを硫黄島記念碑といふ形で今に傳へてゐるのである。

だが、擂鉢山を奪はれても、日本側守備隊の戰意は一向に衰へなかつた。それどころか、「完全占領まで早くて五日、遲くとも二週間」と踏んでゐた海兵隊首腦の當初の豫想をはるかに超えて、栗林兵團の凄じい抵抗はその後四週間以上に亙つて續いた。その結果、上陸した海兵隊員の三分の一が戰死または負傷し、アメリカ側の死傷者は總計二萬八千に達した。日本側は戰死者が最高指揮官栗林中將以下約二萬、殘る一千名はそのほとんどが重傷を負つて抵抗不可能な狀態で捕虜となつた。

日米いづれ劣らぬ勇敢極る獻身

硫黄島の激戰から五十三年後、平成十年十一月十日、ワシントンの硫黄島記念碑の前で、アメリカ海兵隊の發足二百二十三年を祝ふ式典が盛大に擧行された。云はば海兵隊の誕生日のお祝ひであり、毎年の定例行事なのだが、この年は記念碑のブロンズ像の制作者フェリックス・ドゥ・ウェルドン博士が來賓として花を添へ、元海兵隊員チャールズ・ロブ聯邦議會上院議員が主賓として次のやうな祝詞を述べた。

硫黄島における戰鬪精神はドゥ・ウェルドンの彫像にかくも見事に表現されてをりますが、あの激戰の名を口にしただけで、アメリカ國民の胸は深い感動と愛國心ゆゑの興奮に滿たされるのであります。その感情をなんと表現したらよいのか、適切な言葉を私は見出せません。（中略）海兵隊員の勇敢極る獻身的戰鬪によつて、硫黄島の滑走路が占據され、その結果、戰爭が終るまでに、故障した二千五百機以上の「空の超要塞」が破壞を免れ、二萬六千名以上の陸軍航空部隊の搭乘員の生命が救はれる事になつたのであります。

硫黄島攻略の最大の目的は、マリアナ諸島の基地から發進して日本本土を空襲する「空の超要塞」、すなはち當時最新鋭の長距離爆撃機B二九の中繼基地として、硫黄島の滑走路を使用する事にあつた。燃料の缺乏や被彈に備へての緊急着陸用の基地として、もしくは護衛戰闘機の發進用基地として、マリアナ諸島と東京のほぼ中間に位置する硫黄島は恰好の地點にあつた。無論、日本側からすれば、硫黄島を失へば本土はB二九に好きなやうに荒しまはられる事になる。それゆゑ、アメリカ海兵隊員の「勇敢極る獻身」に對し、日本軍もそれに劣らぬ「勇敢極る獻身」を以て立ち向つたのであつた。

記念碑の臺座には、「硫黄島で戰つたアメリカ人にとつては平凡ならざる剛勇が平凡なる美徳であつた」といふ、太平洋方面最高指揮官チェスター・W・ニミッツ提督の有名な言葉が刻まれてゐるが、硫黄島で戰つた日本軍の場合も事情は全く變らなかつた。いや、變らなかつたどころではない。アメリカ軍の上陸から三週間餘り經つて、栗林中將は大本營の秦彦三郎(はたひこさぶろう)參謀次長宛に戰況報告を打電する。いはゆる「栗林中將の最後の戰訓」と云はれるものだが、その中にかういふ悲痛な文言がある。

防備上更ニ致命的ナリシハ彼我物量ノ差懸絶(ケンゼツ)シアリシコトニシテ結局戰術モ對策モ

施ス餘地ナカリシコトナリ。特ニ數十隻ヨリノ間斷ナキ艦砲射撃竝ニ一日延一、六〇〇機ニモ達セシコトアル敵機ノ銃爆撃ニヨリ損害續出セシハ痛恨ノ極ミナリ。

「戰術モ對策モ施ス餘地」が無いと最高指揮官が痛歎せざるを得ないほど、致命的なまでに懸絶した「彼我物量ノ差」が存在しながら、日本軍守備隊の奮闘ゆゑに、アメリカ海兵隊は發足以來未曾有の苛烈な戰闘を強ひられた。戰後、アメリカのある雜誌が第二次世界大戰時の世界の十人の名將の一人として栗林中將の名を擧げたゆゑんだが、それはともかく、栗林が「痛恨ノ極ミナリ」と打電してから二週間後、昭和二十年三月二十一日、大本營は硫黄島の陥落を發表した。一箇月以上に及ぶ守備隊の「凄絶ナル奮戰」と敵兵に與へた甚大な損害、及び「最高指揮官ヲ陣頭」に「全員壯烈ナル總攻撃ヲ敢行」するとの中將の最後の決意を傳へた大本營發表は、強く日本人の心を搖さぶつた。例へば作家高見順は日記にかう記した。

硫黄島玉碎の發表。栗林司令官の電文をアナウンサーが涙にぬれた聲で傳へた。涙がこみあげてきた。硫黄島で怨みをのんで死んだ人々のことを考へると、安閑として

生きてゐることが、何か申しわけない氣がした。（『敗戰日記』）

また、痛烈な時局批判ゆゑに沈默を餘儀無くされ、忿懣やるかたない思ひで戰時を過してゐた清澤洌も、やはり日記にかういふ感懷を記してゐる。

今日、お晝のラジオで、硫黄島の勇士が、最高指揮官を先頭に玉碎したことを傳へた。敵自身の發表によつても確か二萬近くの死傷者ありとのことで、日本軍がいかに奮鬪したかがわかる。ああ。（『暗黑日記』）

清澤は當時最高のアメリカ通の一人であり、米國の戰力や世界情勢を知り拔いてゐたから、終始、アメリカとの戰爭に反對してゐたのだが、眞摯な愛國者でもあつたから、戰爭が勃發するや、自分は「愛國者として、これで臣節を全うしたといへるか、もつと戰爭を避けるために努力しなければならなかつたのではないかと一日中煩悶」せざるを得なかつた。さういふ清澤の「ああ」である。正に萬感胸に迫るものがあつたに相違ない。

一方、中將の鄕里信州の有力紙信濃毎日新聞は、大本營發表の翌日、「噫鄕土が生んだ

栗林指揮官」と題する論説を掲げ、「彈なく水なく、食なき戰ひに最後の憤激をこめて敵中深く突進して行つたであらう中將」を思ふ時、「忿怒に奮ひ起たずにはゐられない」と書き、「我等續かん」と題する別の記事にも、「中將を生んだ鄕土の誇り」を忘れるなと書いてゐる。清澤が屢々日記に記してゐるやうに、この當時、新聞はみな「ジンゴイスト・ペイパー」になつてゐて、「英米に對する敵愾心の昂揚を目がける記事」ばかり載せてをり、信濃毎日も例外ではない。けれども、當時の長野縣民が鄕土の生んだ栗林の健闘を祈り、その壯烈な戰ひぶりに胸を熱くし、我等が鄕土の誇りとして讃へようとした氣持に、嘘いつはりはなかつた。

忘れ去られた栗林中將

長野縣内に限らず、硫黄島戰の後、栗林中將の令名がいかに高かつたかを物語る興味深い逸話を佐藤和正は『妻たちの太平洋戰爭』に紹介してゐる。終戰も近づいた頃、中將の妻、義井夫人は山梨縣鰍澤に疎開してゐたが、チフスが流行してまづ十九歳の長女洋子が、

續いて看病してゐた夫人も感染し、やがて長女が死亡、夫人も生死の境をさ迷つた。鰍澤の人々は手厚く看護してくれたが、感染を恐れて近づきたがらない若い人妻が一人だけゐた。するとその夫は、「硫黄島で玉碎された栗林閣下の奥様の看病が出來んなら、離縁する」と、大聲で叱りつけたといふ。

それが戰時中の日本人であつた。しかるに平成の今、「硫黄島で玉碎された栗林閣下」の名前なんぞ、ほとんどの日本人が知らずにゐる。一昨年、私は中將の生地信州松代（現、長野市松代町）を訪れ、地元の書店で松代の歴史と文化を紹介する本を二册買ひ求めた。いづれもかなり詳細なもので、松代出身の著名人について少からぬ頁數が割かれてゐるが、「鄕土の誇り」だつた筈の栗林中將の名前はどこを探しても見當らない。中將の墓のある明寺については紹介されてゐるものの、昔この寺には酒好きの彌勒様がましましたとか、毎年澤山の蛙が集つて蛙合戰をやるので有名だとかいふ類の事しか記されてゐない。松代にしてさういふ爲體だから、他は推して知るべきである。

栗林中將の名前だけではない、硫黄島の戰鬪についても、今の若い世代は殆ど知るまい。以前、試みに二クラスの學生に訊ねてみた事があるが、知つてゐる學生の數は廖々たるものであつた。いやいや、私も偉さうな事は云へない。私が栗林に關心を持つやうになつた

のは、十數年前、アメリカのマサチューセッツ州の小さな大學町に、在外研究員として滯在してゐた頃の事だからである。ある日、行きつけの古書店の店頭に積み上げられた古書の山を眺めてゐたら、IWO JIMA と脊表紙に記された一冊の書物が目にとまつた。リチャード・ニューカムといふジャーナリストが一九六五年に上梓した硫黄島戰の記録であつた。出版されるやベスト・セラーになつたさうだが、それを讀むまで、私は硫黄島戰については極くありきたりの知識しか持ちあはせてをらず、ニューカムがかなり詳しく紹介してゐる栗林中將の爲人について全く無知であつた。武人として卓越してゐただけでなく、父親として、夫として、そして何よりも一人の人間として、實に見事で魅力的な栗林忠道といふ日本人を知る事が出來たのは、私の場合、ニューカムといふアメリカ人のお蔭であつた。

しかるにアメリカでは今なほ聯邦議會上院議員が、硫黄島戰の「口にしただけで、アメリカ國民の胸が深い感動と愛國心ゆゑの興奮に滿たされる」ゆゑんを熱つぽく語るのである。硫黄島戰に關する記録や研究書の類もほぼ毎年のやうに刊行されてをり、硫黄島記念碑のモデルとなつた水兵の息子が、息子の目から見た硫黄島の勇士達について本を書く豫定だといふ話もある。インターネット上にも、IWO JIMA HOME PAGE といふ立派なウ

エブ・サイトが作られてゐる。そこには例へば過去一年間の全米各紙に載せられた硫黄島戰に關する記事が全て紹介されてゐて、「硫黄島の勇士達の遺してくれた教訓」とか「無私の精神を教へる兵士達の生涯」とかいふ記事を讀むと、硫黄島戰が今なほ活溌な關心の對象であり續けてゐる事が知れる。

そのウェブ・サイトを眺めてゐて知つた事だが、以前、アメリカ空軍が空軍記念碑を建設する計畫を立て、硫黄島記念碑の近くに建設地を豫定してゐると發表したら、海兵隊關係者から猛烈な反撥が卷き起り、その悶着はまだ解決してゐないといふ。計畫された空軍記念碑は硫黄島記念碑を見下ろすくらゐの高さの超近代的な建造物で、そんな代物が近くに聳(そび)え立つ事になつたら、剛勇の國民的象徴は影が薄くなり、神聖なる場所の有難みが減じる事になる、斷乎沮止せねばならない、といふのが海兵隊の云ひ分であり、「硫黄島の仲間達」と稱する有志が反對運動を活溌に展開し、同調する政治家達が計畫中止を求める法案を議會に提出する騒ぎになつてゐるらしい。海兵隊の式典で祝詞を述べたロブ上院議員も反對派の一人であり、祝詞の中でもこの問題に言及し、記念碑の神聖を守れと叫んでゐる。

これを要するに、日米兩國民の關心の度合に著しい懸隔(けんかく)がある譯だが、勝者アメリカが

同胞の「平凡ならざる剛勇」の誇らしい記憶を失ふまいとするのは人間の自然の感情として納得が行くものの、勝者に劣らぬ「平凡ならざる剛勇」を發揮した同胞の輝かしい過去を、どうして我々日本人は忘れて平氣でゐられるのか。日本人の精神的武裝解除を狙つたマッカーサーにしてやられ、アメリカに忘れさせられたのだと、つまりは東京裁判史觀のせゐだと、「保守派」知識人は云ふであらう。だが、例へばソ聯共産黨の七十年以上に及ぶ凄じい迫害にもかかはらず、ロシア正教の信仰は忘れ去られる事はなかつたし、同じく共産黨の支配下にあつたポーランド人もカソリック信仰を捨てはしなかつた。また、これは後にくはしく觸れるが、南北戰爭が終結してから百三十年以上經つた今もなほ、アメリカ南部には敗北した南部聯合國の正義を主張し、南部の文化について誇らしげに語る南部人が少からず存在する。更にまた、セルヴィア民族がコソヴォ地方に異常なまでの執着を示すのは、六百年以上前のコソヴォの戰ひに於ける敗北の歷史に原因があるといふ説もあるし、ユダヤ民族に至つては、國家が滅亡した紀元前の大昔から二十世紀に至るまで國家再建の夢を捨てる事はなかつた。如何に支配者が忘れさせようとしても、如何に歲月が流れても、何かを忘れようとしない民族はゐる。日本人の健忘症には、他律的な要因のみでは説明できぬ、それゆゑなほさら深刻な、宿命的なまでに深刻な原因があるのではあるま

いか。

それかあらぬか、「硫黄島で玉碎された栗林閣下の奥様」を手厚く看病した鰍澤の住民は、敗戰の日、昭和二十年八月十五日が過ぎると、一人去り、二人去り、つひには誰もゐなくなつて、最後は長女の位牌と夫人だけが取り殘される事になつたといふ。かういふ變り身の早さを、敗戰時の日本人の豹變ぶりを、東京裁判史觀は説明できまい。極東國際軍事裁判、いはゆる東京裁判の開廷は敗戰の翌年、昭和二十一年の五月なのである。

時世の在り様で變る行動

その點、高村光雲の『幕末維新懷古談』の次の一節は頗る興味深い。周知の如く、明治初年、維新政府の神道國教化政策により、廢佛毀釋の嵐が國中を吹き荒れたが、當時の世相について光雲はかう語つてゐる。

これは、つまり、神社を保護して佛様の方を自然破壞するやうなやり方でありまし

たから、さなきだに、今まで枝葉を押し廣げてゐた佛様側のいろいろなものは悉くこの際打ち毀(こは)されて行きました。經卷などは大部なものであるから、川へ流すとか、原へ持つて行つて燒くとかいふ風で、隨分結構なものが滅茶滅茶にされました。奈良や、京都などでは特にそれが甚(はなはだし)かつた中に、あの興福寺の塔などが二束三文で賣り物に出たけれども、誰も買ひ人がなかつたといふやうな滑稽な話があるくらゐです。しかし當時は別に滑稽でも何でもなく、時世の急轉した時代でありますから、何事につけても、かういふ風で、それは自然の勢ひであつて、當然の事として不思議に思ふものもありませんでした。また今日でこそかういふ際に、どうかしたらなどと思ふでせうが當時は、誰もそれをどうする氣も起こらない。廢滅すべきものは物の善惡高下によらず滅茶滅茶になつて行つたものである。これは今日ではちよつと想像に及びがたいくらゐのものです。

これは頗る有益な證言である。時世が急轉すれば、それが「自然の勢ひ」といふ事になつて、「興福寺の塔」のやうな貴重な文化財が二束三文で賣りに出されて買ひ手がつかず、さういふ事實が當然の事と見なされて奇怪に思ふ者はゐない。それは詰り、「物の善惡高

下」によつてではなく、時世の在り様によつて、外的状況の變化によつて、大多數の日本人は己が行動を決定するといふ事に他ならない。栗林夫人に對する鰍澤の村人は戰時中も敗戰直後も極めて日本的にふるまつたのである。社會の木鐸を氣取る新聞の場合も事情は一向にかはらない。たとへば、先に引いた信濃毎日新聞の論説、「噫鄕土が生んだ栗林指揮官」の結びはかうなつてゐる。

> 莞爾として死地に赴いた中將の香り高い殉國の精神に應へる道は唯一つ、百八十萬縣民が硫黄島將兵の決意と覺悟をはつきり胸に刻んで、本土接岸の醜敵を誓つて殲滅することである。

正に「今日ではちよつと想像に及びがたいくらゐ」の文章、北朝鮮の御用新聞や右翼のアジビラ以外に、當節お目にかかる事の出來ない類の文章である。けれども、戰時中は大多數の日本人がそれを不思議とも滑稽とも思はなかつた。この種の「浪花節文化の仇討思想」ゆゑの悲憤慷慨を清澤洌は日記の中で嗤つてゐるが、さういふ事が出來たのは清澤のやうなごく小數の天邪鬼に限られた。しかるに、戰爭に負けて御時世が急轉したものだ

から、「本土接岸の醜敵」を殲滅するといふ誓ひなんぞ忽ち忘れられ、マスコミを先頭に「一億總懺悔」なる茶番を演じ、廢佛毀釋の時と同樣、或はそれ以上の過去の「滅茶滅茶な打ち壞し」に狂奔する事になつた。

事大打ちこはし思想と積極的健忘症

その「打ち毀し」の凄じさについては、丹念に探せば幾つかの證言を見出せる。例へば昭和四十八年に刊行された『陸軍大學校』は帝國陸軍のエリート養成機關たる陸大に關する貴重な資料集だが、その「編者あとがき」に上方快男がかう書いてゐる。

本書を編纂するにあたつては資料に忠實なることを方針とし、且つその實行に努めたのであつたが、誠に資料は廖廖たるものであつた。終戰のショックがまざまざと見られる現象であつた。

帝國陸軍が日本の「ドライビング・フォース」であり、「今日の陸軍は陸軍幕府以外の何物でもない」と、昭和十九年、高松宮は語つたさうだが、「陸軍幕府」の頂點にあつたのが陸軍大學校を卒業したエリート軍人達であつた。大正末期、陸大のある戰術教官が學生に、本郷と青山との教育を比較論述せよといふ課題のレポートを書かせた事があつた。本郷の東京帝國大學と當時青山にあつた陸軍大學校は比較論述の對象とされる「日本を代表する」大學だつたのであり、さういふ陸大の權威は敗戰時まで搖ぐ事はなかつた。しかるに、「終戰のショック」ゆゑに、さほどの權威を誇つてゐた陸大に關する資料が「廖廖たるもの」となつて仕舞つた譯である。

また、昭和五十五年に公刊された『昭和の陸軍』は時代考證家の立場から帝國陸軍の實相を具體的に紹介した、これまた貴重な書物だが、監修した寺田近雄（てらだちかを）は「日本軍考證のむづかしさ」と題して、やはり資料不足ゆゑの苦勞を語ると共に、その原因について興味深い考察を加へてゐる。寺田によれば、舊日本軍の資料消滅の過程には大きく分けて六つの段階があつたといふ。まづ、長い戰爭期間中、戰鬪や戰災により多くの兵器や資料が消滅したのが第一段階。次いで、終戰となり、ポツダム宣言に戰犯處罰條項が含まれてゐる事を知り、後難を怖れた軍自身の手によつて夥（おびただ）しい資料が破棄燒却されたのが第二段階。降

伏後、聯合軍の手に引き渡された兵器や資料がごく一部を除きすべて破棄されたのが第三段階。そして、復員者が歸還する事になつて、上官から持ち歸る事を禁じられたり、自ら後難を怖れたりして、多數の戰鬪記録が廢棄されたのが第四段階、といふ事になる。が、戰時中および降伏直後における資料の消滅は概ね非常時ゆゑの、もしくは敗戰ゆゑの已むを得ざる事情に基くものであつた。より注目すべきは續く二つの段階である。

まづ、第五段階だが、寺田によれば、進駐軍による五年に亙る占領期間中、特にその初期に「大うちこはし」の現象が生じ大量の資料が消滅した。その時期、「昨日までの軍國主義者は一夜の裡に民主主義者と變貌し、法律も教科書もあつといふ間に樣變りし、舊時代のものは傳統的發想、歷史的遺產までも含めて大うちこはし」に見舞はれるのだが、「その根本的エネルギーとなつたのは進駐軍から來る外壓よりも、むしろ時勢に逆行し、時代に遲れることを極度に怖れる後進的事大主義」であつた。すなはち、「時の權力者の意響を先取りして、むしろその意響以上の實行を伴ふこの事大うちこはし思想」ゆゑに、「帝國陸海軍の痕跡はむしろ戰後日本人自身の手で證據湮滅のために消し去られた」のであつた。

そして、高度成長期の到來と共に最後の第六段階が開始され、經濟成長の掛聲の下、

「すべて舊態のものはかへりみられず弊履のやうに打ち捨てられ」、日本軍の痕跡は「なほ激しい勢いで消滅しつつある」が、自國民の過去に對するその種の「積極的健忘症からくる資料の不足」こそが日本軍を研究する者にとつての「大きな壁」になつてゐると寺田は嘆じてゐる。「積極的健忘症」とは正に云ひ得て妙だが、「事大打ちこはし思想」と同樣、「健忘症」についても、その原因を外部に求める譯には行かぬ。我々日本人はその國民的性格に從ひ、むしろ進んで、すなはち「積極的」に過去を打ち捨てて來たのであり、されば こそ問題は深刻なのである。紀元前の昔、ギリシャの哲人ヘラクレイトスは、「個人の性格は宿命である」と斷じたが、個人にとつてと同樣、國民にとつても、性格は死なねば直らぬ「宿命」に他ならない。

現に、テポドンが頭上を飛び越えて飛ぶと、高村光雲の云ひ種ではないが、今は「時世の急轉した時代でありますから」といふ事になつて、つい最近まで「有事研究」に噛みつく事しか知らなかつた朝日新聞までが「白晝堂々と有事シュミレーションを敢行する」企畫を立てる事になる。それについて、過日、産經新聞「斜斷機」欄のある筆者は、有事法制を論じても右翼だの軍國主義者だのと譏られない時代が到來した譯であり、朝日の企畫に「心から拍手喝采を送りたい」と書いた。何たる極樂蜻蛉か。「事大主義」とは力の

小なる者が「大」なる者に「事（つか）」へようとする態度の謂ひだが、朝日はいかにも「後進的事大主義」の國の新聞らしく、時世といふ力の「大」なるものに「事（つか）」へようとする卑屈と輕佻浮薄の正體を暴露したに過ぎない。今後時世が急轉すれば、またぞろ別の大なる者に事へるに決つてゐる。

日本人は「ゴム人形」

硫黄島戰に續く沖縄戰に於て日本側の作戰計畫を立案し、敵アメリカ側にも頗る高く評價された沖縄軍高級參謀八原博通（やはらひろみち）大佐は、戰後、ヴェトナム戰爭が深刻化した頃、日本のマスコミ報道の在り様を苦々しく思ひ日記にかう記した。

> 我が國の知識階級、マスコミなどは專ら米國にのみ辛く當り、手を引けと非難したり、しきりに平和平和と叫ぶだけである。（中略）國民の感情や態度は、戰爭中とその方向こそ反對だが、その本質的な動きは全く同じではないか。

八原の云ふ通り、日本人の感情や態度の「本質的な動き」は大東亞戰爭の時もヴェトナム戰爭の時も「全く同じ」であり、掛聲が「鬼畜米英」から「平和と繁榮」に變つただけの事でしかない。そして勿論、さういふ本質は今も一向に變つてゐない。八原は栗林中將と共通點が多く、いづれも陸大をすこぶる優秀な成績で卒業してアメリカに留學した陸軍有數の知米派であり、アメリカの國力を輕視する陸軍の支配的風潮を批判し、戰時中は軍の中樞から遠ざけられ、戰爭末期になつて初めて、それぞれ沖繩と硫黄島に活躍の場を與へられ、共に「戰略持久作戰」を敢行して敵に多大な出血を強要し、敵に稱讃されたのであり、八原にとつて栗林は肖(あやか)るべき先輩であつた。沖繩の日本軍は增援も勝利も期待し得ないまま、本土決戰準備の時間稼ぎのため、洞窟にこもつて粘り強く戰つたが、その苦しさに耐へかね、軍司令官や參謀長までが玉碎攻擊で早くけりをつけたいといふ氣持に支配されるやうになり、八原は孤立せざるを得なかつた。しかし、沖繩戰が始る前に、栗林が硫黄島から大本營へ送り續けた戰訓が大佐を支へた。「栗林將軍は最後の瞬間まで、苦しい、心理的には耐へられない持久戰を戰ひ拔き、米軍に多大の出血を強要したではないか」、大佐はさう考へ、孤立に耐へた。孤立を忌む國民性を分析した八原の興味深い一文がある。

日本人の性格は、ひと言で言へば弱い。（中略）英米人があくまで冷靜、知的で、方針、目的を忘れず、利害打算を失せず、すこぶる意志強固であるにくらべ、きはめて對照的である。

沖縄戰でも自己の基本的任務と最後の運命を認識し覺悟して、戰略持久の一線にその努力を傾注するといふ、精神的重壓に耐へられないために、攻擊を欲しさらに運命の打開を望んで妄動するが如き、あるいは陣地を棄てて、いたづらに挺身斬込みを欲したり、まだ戰鬪力を有するにかかはらず自決するやうな風潮は、精神力が未だ眞に強力でないことを語るものである。

性格の弱さと關聯して、日本人の德性も、一應外見は美しく整へることに巧みだが、自主自律性が弱く、傳統慣習の奴隷となるか、あるいは輿論、世評、他人の手前、もしくは軍規軍律のため止むを得ず本心に反して行動する傾向が強い。從つて他人が見てをらず、傳統、世評、軍規などに對して口實がつくか、あるいはつけ得る場合は利己中心の行動を取るものが少なくない。

身方を相手に惡戰苦鬪せざるを得なかつた八原ならではの洞察に滿ちた文章である。

我々は自主自律性が弱いから、「傳統慣習の奴隷」になつたり、「輿論、世評、他人の手前」を憚(はばか)つたりして行動する。他人の手前ばかり氣にして相手次第でどうにでも態度を變へる國民性を、明治の昔、福澤諭吉は「ゴム人形」と評してからかつたが、有事研究をめぐる朝日新聞の豹變が證してゐるやうに、平成の今も日本人は「ゴム人形」なのである。

けれども、栗林も八原も「ゴム人形」を率ゐて「ゴム人形」ならざるアメリカ軍と互角に渡り合つた。それが如何にして可能となつたかといふ問題はしばらく措(お)き、ここでは、同じく敗戰を經驗しながらも「ゴム人形」ならざる國民は我々といかに異質な物の考へ方をするかについて少しく語る事とする。

南部人フォークナーの言葉

昭和三十一年、ウィリアム・フォークナーが來日して一夏滯在した事がある。アーネスト・ヘミングウェイと竝んで二十世紀アメリカ文學を代表する南部出身の大作家は、「日本の若者達へ」と題するメッセージを携へてやつて來て、日本の若い世代を激勵しようと

した。それはかう始つてゐた。

百年前、私の祖國アメリカは經濟も文化も一つではなく、二つのそれらから成立つてをり、しかも互ひに激しく對立してゐたので、九十五年前、決着をつけるべく戰つて我々南部が敗れた。戰場となつたのは果しない大海原の中の中立地帶ではなく、我々自身の家庭、庭園、農場であつた。喩(たと)へてみれば、沖繩やガダルカナルのやうにはるか彼方の洋上ではなく、本州と北海道が戰場になつたやうな具合であつた。征服者達は我々の土地や家屋に侵入し、我々が敗北して戰爭が終つた後も出て行かうとはしなかつた。南部は敗れた戰鬪によつて荒廢せしめられただけではない。敗北と降伏に續く十年間、征服者達は我々に殘された僅かなものまでも掠奪せずにはおかなかつた。

このフォークナーの言葉に「度膽を抜かれた」と、佐伯彰一(さえきしょういち)は『日米關係の中の文學』に書いてゐる。南北戰爭は内戰だつた筈なのに、日米といふ國家間の戰爭と同じ次元で語られてをり、いはば「南部と日本とが、おなじ敵のヤンキーに敗れ、苦しめられた」とい

ふやうな云ひ種だから、これでは「日本の若者」どころか、「大方の日本人讀者にも通じさうもないと考へた」といふのだが、今日の大方の日本人讀者にだつて通じないであらう。だが、フォークナーはアメリカ人として、少くとも南部のアメリカ人として、殊さら突飛な言辭を弄した譯ではない。南北戰爭論の古典的著作『愛國の血潮』にエドマンド・ウィルソンが指摘してゐる通り、戰前の南部と北部は二つの別々の國家と云つても過言ではないくらゐ、文化も經濟システムも異質で、それゆゑに激しく反目し合つてをり、戰爭が勃發するや、北軍は南部の全域に侵攻して、殊にグラントとシャーマンの兩將が「總力戰」による勝利を追求するやうになつてからは、南部の廣大な地域を容赦なく破壞し、更には戰後のいはゆる南部再建時代に於て、北部の「征服者」は南部を植民地同然に扱ひ收奪を恣にした。そしてその歷史の傷痕は、二十世紀も終らうといふ今なほ、癒え切つてはゐない。

例へば一九九九年暮のワシントン・ポスト紙に、アメリカ南部のサウス・キャロライナ州に住む或る地主の發言が掲載された。六十歲のこの地主は、南部人たる者は「南部の誓ひ」なるものを斷乎守らねばならぬと信じてゐて、「眞の南部人の生き方に愛情と尊敬の念を抱く」事、及び「卑劣と殘忍の代名詞として以外、シャーマンの名前を斷じて口にし

ない」事を常に心に誓つてゐるといふ。北軍のシャーマン將軍は南部の要衝アトランタを燒きはらひ、ついで六萬二千の大軍を率ゐて軍事史上有名な「海への進軍」を敢行、ジョージア州からサウス・キャロライナ州大西洋岸に至る廣大な地域が破壞と掠奪の餌食になつた。それゆゑ北軍の猛將への深い怨みを百三十年以上經つた今なほ、南部人は忘れてゐないのであり、その南部人の血はフォークナーの體内にも流れてゐる。代表作『アブサロム、アブサロム！』に於て、南部人の若者が友人のカナダ人の若者に、アメリカ南部といふ獨特の世界の過去及び現在について話をする。カナダ人の若者は云ふ、「シャーマン將軍だけは許せない」といふ強烈な感情を、南部人は云はば「生得の權利」として、世々代々受け繼いで行くといふ譯だな。

人間に關する普遍的眞實

けれども、フォークナーは敵たるヤンキーへの怨みつらみを語るべく日本へやつて來た譯ではない。「日本の若者達」に彼は傳へたかつた、敗戰から南部人が何を學んだかとい

ふ事を。南部人は人間に關する「普遍的眞實」を學んだのだとフォークナーは云ひたかつた。人間に關する「普遍的眞實」とは何か。「戰爭も悲嘆も絶望も苦惱も、人間の忍耐する力を、希望を抱く力を、決して破壞するものではない」、それを證してゐるのが、藝術を人間が今なほ作り續けてゐるといふ事實だとフォークナーは云ふ。なぜなら藝術こそは「災厄の下で不屈の忍耐力と勇氣とを發揮した先人の歴史を記録に留め、希望を抱く事の正當性を主張するために、人類が發明もしくは發見した、この上なく強靱で永續的な手段」だからだ。藝術は如何なる不幸にも屈しない人間の精神力を、「希望を抱く事の正當性」を、つまりは人間の偉大の可能性を何よりも力強く證してゐるのであり、正にその點にこそ藝術の存在理由はある、さうフォークナーは云ひ切るのである。

けれども、人間が藝術を必要とする存在であり續ける限り、不幸もまた存在し續ける事になる。ユートピアとはつひにこの世のものではなく、それもまた否定し得ぬ「普遍的眞實」に他ならない。そして、それが「普遍的眞實」たるゆゑんを痛切に思ひ知らされるのが、戰爭と災厄に直面した時だとフォークナーは云ふ。「戰爭と災厄こそは、人類が忍耐と剛毅の記録をどうしても必要とする存在である事を思ひ出させる」。なぜなら、重大な危難にさらされた時、人間は忍耐強くも剛毅でもない己れに、弱くて慘めな己れの姿に、

つまりは人間の悲慘といふ現實に、嫌でも向きあはざるを得なくなるからだ。さういふ時にこそ、絶望の淵に沈まぬために、人間は先人の「忍耐と剛毅の記録をどうしても必要とする」やうになる。

既に明らかであらう。フォークナーの云ふ「普遍的眞實」とは、偉大と悲慘の兩極を搖れ動いて止まぬ、道德的存在としての人間の在り樣それ自體に他ならず、南部人は敗戰といふ苦難の經驗を通して、それを思ひ知らされたといふ譯である。さういふ過去を背負ふ傳統の中から、二十世紀になつて、南部出身作家による文學いはゆる「南部文學」が誕生し、アメリカ南部といふ一つの「地方的」な枠組を超えて世界中に讀者を獲得するに至るが、南部の過去を振りかへる時、それは決して偶然とは思へぬ成り行きだつたとフォークナーは云ひ、續けてかう語つてゐる。

同じやうな事が、今後數年間のうちに、ここ日本にも必ずや起るであらう。災厄と絶望の中から、全世界がその言葉に耳を傾けたがるやうな日本の作家達があらはれ、さういふ作家達が日本的な眞實についてではなく、普遍的な眞實について語る事になるに相違ない。

フォークナーとしては激勵の積りだつたのだらうが、結果的にこれは全くの的外れであつた。十年ほど前、近代日本文學の飜譯の仕事をしてゐるアメリカ人から聞いた話だが、アメリカでは日本の文學作品を飜譯しても、學術機關からの補助金が貰へない限り出版されない場合が多いといふ。一般讀者の關心がきはめて低くて、出版しても利益が見込めないから出版社が食指を動かさないのださうである。この時に限らず、經濟以外の分野で日本が「地方的」な枠組を全く脱してゐないといふ事を、滯米中に私は屢々痛感した。けれども、世界に類例なき「平和憲法」を半世紀以上も後生大事に守り續けてゐるこの國、國民の大多數が「日本的な眞實」にしか關心を有しないこの國で、作家だけが「普遍的な眞實」に關心を持ち、それについて全うな事を語れる道理はない。八原參謀が喝破した通り、日本人の感情や態度の「本質的な動き」は、視野狹隘（けふあい）といふ點では戰中も戰後も「全く同じ」であり、それは詰り、「日本的な眞實」を超える「普遍的な眞實」を追究しようとする傳統が存在してゐないといふ事に他ならない。

一方、ジョージ・スタイナーが『青髭（あおひげ）の城にて』に書いてゐるやうに、ソクラテスの昔から西洋人の本質は「眞實を追ふ狩人」たる所にあり、「普遍的な眞實」の追究こそがその最大の關心事に他ならず、フォークナーが日本の作家による「日本的な眞實」からの脱

却を豫言したのも、一人の全うな西洋人として至極あたりまへの考へを口にしただけの事だつたのかも知れぬ。

自己批判こそ道徳的

だが、ソクラテス以降の傳統はこの國のものではない。開國から一世紀半、「全世界が耳を傾けたがる」西歐の大作家の作品は大量に飜譯されたにもかかはらず、「眞實を追ふ狩人」としての西歐精神だけは身につかなかつたから、我々は敗戰といふ貴重な經驗を「普遍的な眞實」を學ぶ手懸りとする事も出來ず、狹隘な「日本的眞實」を乘り越えられずにゐる。杉田一次（すぎたいちじ）によれば、硫黄島の栗林は參謀に、「アメリカの軍需工場を見た事もない作戰課の連中に何が出來るか。盲人に道案内させるのと同じだ」と語り、戰爭指導の中樞たる參謀本部作戰課の度し難き主觀主義を口をきはめて罵倒したといふ。明治の昔、夏目漱石は日露戰爭後の日本人の視野狹窄症の愚劣淺薄を嗤（わら）つたが、その種の愚劣を我々日本人は飽かずに繰りかへしてゐる。戰爭であれ經濟競爭であれ、勝てばひたすら有頂點

になり、負ければひたすら萎縮する。その「パブロフの犬」同然のオートマティズムを、いつまで經つても斷ち切る事が出來ない。「和を以て尊し」となした聖德太子の大昔から、周圍の狀況に如何に和するかが最大の關心事で、狀況の變化なんぞに左右されない「普遍的な眞實」にはさつぱり無關心なのが我々の情けない國民性なのである。各種の神經症の症狀の中、日本では對人恐怖が壓倒的に多く、それは歐米には見られぬ現象ださうだが、その原因は眞理への畏敬の念より人間關係の和合を重視する日本文化の本質に在る、と說く心理學者がゐるといふ。成程、「眞理への畏敬の念」の有無といふ一點において、彼我の文化は決定的に異つてゐる。

自國文化の弱點を論ふのは樂しい事ではない。けれども、再び鎖國をする事が出來ない以上、己が弱點を弱點と認めなければ、前車の轍（てつ）を踏む愚を未來永劫に繰りかへす事にならざるを得まい。いづれ詳細に論ずるが、栗林の敵はアメリカ軍だけではなかつた。八原の場合と同樣、日本文化の弱點も敵なのであつた。日本軍の堅牢極まる地下要塞に散々苦しめられたホーランド・スミス米海兵隊中將は、戰後、回想錄に、「太平洋で戰つたすべての敵の中で、栗林は最も手強い相手」だつたが、硫黃島の地下防備には「栗林の個性が深く刻み込まれてゐた」と記してゐる。栗林の硫黃島における統率は、「眞實を追ふ狩人」

の傳統を背負ふアメリカの軍人に舌を卷かせるほど合理的かつ徹底的なものであつた。栗林は味方の弱點から決して目を背けなかつたが、僅か五十數年前、さういふ剛毅かつ強靱な精神をそなへた日本人がゐたのである。「現在になり得ない過去を思ひ出すのは無意味」だとキルケゴールは云つたが、栗林や八原の惡戰苦鬪は「現在になり得ない過去」ではない。日本國が存在して外國交際が必要である限り、現在はもとより將來も決して古びる事のない切實な問題である。それゆゑ我々は栗林に倣ひ、自國文化についてもスペードをスペードと云はねばならぬ。本來、自國の文化は幾らでも批判してよいのである。それが自國民に向つてなされる限り、憚る必要は毫も無い。フォークナーと竝ぶ「南部文學」の旗手ロバート・ペン・ウォーレンが云つたやうに、それは「自己自身を批判する」事と同質だからだ。ウォーレンは語つてゐる。

理知的な人間は自國について、他の何事についてより激しく批判する傾向がある。それで結構、さうすべきなのだ。それは自己批判でもある。一層知的に、一層十分に生きようとする道でもある。（『ウォーレンと語る』）

一國の文化は國民一人一人の自我の中に凝縮されてをり、「世界の警察官」たらんとするアメリカの使命感と、アメリカ國民それぞれの理想主義的な自我とを切り離して考へる譯には行かぬ。それゆゑ、眞摯（しんし）な自國文化批判は眞摯な自己批判に通ずるのである。トマス・マンの云つたやうに、「自己批判こそは眞に道的な行爲」なのであり、道的存在として「十分に生きようとする」ならば、我々は自己の知的な吟味を回避する譯には行かない。それは斷じて自虐ではない。自己を尊重するからこそ「一層知的に、一層十分に生き」る事を自己に求めるのである。ウォーレン自身、優れて理知的な人間だつたから、自國特有のリベラリズムの淺薄を痛烈に批判したが、同時に「アメリカが好きで堪らない」と屢々（しばしば）公言してゐる。自國への批判と愛着とは兩立し得るのである。

美德の寶庫、大いなる口實

實はさういふ二元論的思考が不得手なのも日本文化の弱點の一つなのだが、それについてもいづれ詳述するとして、ここではウォーレンの辛辣な自國批判の實例として、『南北

戰爭の遺産』と題する著書を紹介する事にする。一九六一年、南北戰爭勃發の一世紀後に上梓されたこの書において、ウォーレンは南北戰爭が勝者と敗者の雙方に頗る欺瞞的な精神の傳統をもたらしたと云ひ、北部のそれを「美の寶庫」、南部のそれを「大いなる口實」と名づける。「美の寶庫」とは何か。北部人が北部の成功と勝利の原因を己れのの高さや正義を重んずる意志の強さに求めたがる態度である。勝利を收め繁榮を享受してゐるのは、とどの詰り、常に有なる生き方を心掛け正義のための自己犧牲を厭はなかつたからだと思ひ込み、都合の悪い過去に目をふさぐ僞善であり、元來、ピューリタンの末裔たるヤンキーに根強い傾向なのだが、南北戰爭に勝つて、獨善と僞善の度合が甚しくなつたとウォーレンは云ふ。

一方、「大いなる口實」とは、南部人が敗戰後の南部における好ましからざる事どもの原因を、常に敗戰で被つた損傷に歸さうとする態度を云ふ。南部人が常に怠惰で、野卑で、墮落した生活を送り續け、南部全體が發展しないのは、ひとへに敗戰の痛手のせゐ、北部人からひどい仕打を受けたせゐだといふ譯で、つまりは敗戰を一切の「口實」にして、己が腑甲斐なさの原因を自己の内部に求める事を回避する甚だ退嬰的頽廢的な態度をいふ。ウォーレンは書いてゐる。

「大いなる口實」の及す作用のすべては神經症的オートマティズムに似てゐる。精神的外傷が餘りにひどく南部人は今なほ現實に直面する事が出來ず、機械的反覆が明晰な知覺と正直な思考を妨げる。南部のみならず北部においても（北部にも北部なりの現實回避の心理的メカニズムが存在する）、つまりアメリカ人はみな、悍（おぞま）しいオートマティズムに墮し、共有する過去の錯誤を再演すべく宿命づけられてゐるやうに思はれる。

南部出身のウォーレンは北部を斬ると同時に南部をも斬つてゐる。「明晰な知覺と正直な思考」を何よりも重んじ、「現實回避の心理的メカニズム」を斥（しりぞ）けようとする。あるアメリカの學者の云ふやうに、ウォーレンの特質は、「存在する現實に對し、それが如何に醜悪であらうと目を背ける事を斷乎拒絶する」態度にある。さういふ峻烈なリアリズムゆゑに、自國を論（あげつら）つて、北部にも南部にも存在する宿命的としか云ひ様のない深刻な問題に逢着する。ウォーレンの敬愛するメルヴィルは「死なねば治らぬ痛み」を知れと云つたが、人間誰しも生ある限り乗り越えられぬ宿命の軛（くびき）の下に生きてゐる。文化も宿命の一つであり、北部人も南部人も、そしてもとより日本人も、結局はそれぞれの文化の宿命に、その

憂鬱なるオートマティズムに屈せざるを得ないのかも知れぬ。

眞實を追ふ狩人の傳統

けれども、ジョージ・オーウェルが「ナショナリズムに關する覺書」に書いたやうに、偏見や差別意識やナショナリズムゆゑの愛憎を免れないのも人間の宿命だが、いかに不愉快であつても、その種の感情が己れの心中に存在する事を認め、それと戰ひ、思考の歪曲を防ぐ努力をする事は出來るのであり、それこそが眞の意味での「道的努力」だと全うな知識人は考へる。ウォーレンも全うな知識人だから、「存在する現實」から目を背けず、内なる「現實回避の心理的メカニズム」と戰ふ事が「知的に、十分に生き」る事だと信じてゐた。いや、オーウェルやウォーレンだけではない。古代ギリシャの昔からさういふ「道的努力」の價値を西洋人は稱讃してやまなかつた。ウォーレンは書いてゐる。

詩は、とりわけ力強い詩は、外的事實としての勝利を讃美する事にさしたる關心を

示さない。ギリシャ悲劇はマラトンやサモトラケにおける勝利を可能ならしめた活力と意志力の所産だが、さればとて、それらの勝利を稱讃してはゐない。同様に『ハムレット』や『リア王』においてもスペイン無敵艦隊の撃破は稱讃されてはゐない。詩が高い稱讃を捧げるのは、人間性と宿命にまつはる深淵や暗闇に直面して、怯(ひる)む事なく立ち向はうとする人間の精神力に對してなのだ。（『デモクラシーと詩』）

斷るまでもなく、ここに云ふ「詩」は戯曲や小説を含むいはゆる言語藝術の全てを指す。ギリシャ悲劇はペルシャ帝國との戰ひに勝利した古代ギリシャの隆盛期に、シェイクスピア悲劇はスペイン帝國との戰ひに勝利したエリザベス朝イギリスの興隆期に創られた。けれども、ウォーレンの云ふやうに、アイスキュロスもソフォクレスもシェイクスピアも、「外的事實」としての自國の勝利を讃へようとはしなかつた。勝者であれ敗者であれ、人間である限り誰しも免れ得ない「普遍的眞實」の追究こそが、彼らの最大の關心事だつたからに他ならない。それゆゑ彼らは、「人間性と宿命にまつはる深淵や暗闇に直面」しながらも、怯む事なくそれに立ち向ひ敗れ去る主人公を好んで描いたのであつた。

例へばソフォクレスの描いたオイディプス王は、自國テーバイにおける最高の知者をも

つて自他共に任じ、「神々に等しい」智慧を持つと自負してゐるが、ふとした事から己が素性に疑惑を抱き、出生の祕密を突き止めようとし、眞實を飽くまで追究した結果、知らずして父親を殺害し母親と同衾（どうきん）し、四人の子供をもうけてゐたといふ悍（おぞま）しい己れの過去を知る。「神々に等しい」知者の筈だつたオイディプスが、實は、近親相姦と親殺しといふ忌はしい禁制を二つながら犯した「人間の中で最も呪はれた者」でしかなかつた譯である。

作者ソフォクレスの意圖が人間の傲慢（ヒュブリス）への警告にあつた事は明らかであり、如何に知力を誇らうと、いつの世にも人間は神々から遙かに懸け離れた不完全な存在でしかない。己が正體も己が未來も共につかめぬ哀れな生き物に過ぎない。

けれども、オイディプスの「眞實を追ふ狩人」としての果敢なヒロイズムに我々は打たれる。彼は后（きさき）にして母親のイオカステから、「物事を突き詰めてお考へにならぬやう」にと忠告されながら、「眞實は飽くまで突き止めねばならぬ」とて、己が「宿命にまつはる深淵と暗闇」を追究し破滅するが、最後、オイディプスは自殺したイオカステの上着から金の止金を引き抜き、それを高く振りかざし、己が兩の目に突き刺してかう叫ぶ。

お前ら、わが眼よ、もはや見てくれるな、俺を襲つたすべての禍ひ、俺が犯したあ

またの罪業、ああ、その空恐ろしさを！ いままで長いこと、お前らは、俺が決して見てはならぬ人々を見、見たいと冀(こひねが)つた人々を見損つて來た、それを見分けることの出來なかつたお前らは、もう誰をも見てはならぬ、永劫の闇に鎖されてゐるがいい！

（福田恆存譯）

作中、盲目の預言者テイレシアスが云ふやうに、「物が見える」積りでゐたオイディプスは、實は何も見えてはゐなかつた。同様に、シェイクスピアの描いたリア王も、權力を手にしてゐた時には、人の世の眞實を見分ける事が出來ず、悪黨の甘言をよろこび、眞實の愛情ゆゑの發言や忠義ゆゑの諫言に腹を立て、愚かにも悪黨に權力を讓り渡し、その結果、屈辱的な境遇に突き落される事となる。けれども、權力を失つたリアの目には、それまで虚飾に欺(あざむ)かれて見えなかつた人間にまつはる「普遍的眞實」がまざまざと見えるやうになる。嵐の荒野をさまよふリアは、裸同然の姿で地べたを這ひずりまはる乞食の哀れな姿を見、かう呟(つぶや)くのである。

人間は唯これだけのものなのか。（中略）人間、外から附けた物を剥がしてしまへ

ば、皆、貴様と同じ哀れな裸の二足獣に過ぎぬ。（福田恆存譯）

勝者も敗者も哀れな裸の二足獣

『オイディプス王』にせよ、『リア王』にせよ、西洋の古典は我々に、「人間性と宿命にまつはる深淵や暗闇」を、人間は「神々に等しい」どころか、實は「哀れな裸の二足獣」でしかないといふ、時代と國籍を問はぬ「普遍的眞實」を教へるが、さういふ次元で物事を考へるならば、狀況といふ「外的事實」の變化に振りまはされて一喜一憂する事の愚かしさを痛感するであらう。勝つて有頂點になるのも、負けて萎縮するのも、共に愚かである。勝者も敗者も、畢竟、「哀れな裸の二足獣」でしかない。人間に關するさういふ突きつめた現實を、福田恆存のいふ「煮つめられた現實」を、たとへばメルヴィルは常に見据ゑてゐたから、南北戰爭の際は北部の勝利を冀ふ（こひねが）北部人であつたにもかかはらず、戰爭が終り、南部への苛酷な報復を叫ぶ聲が高まると、それを極めて苦々しく思ひ、北部人にも南部人にも共通する「人間性」の次元に立つて物を云ひ、「愛國心と偏狹とが手を結ばねばなら

ぬ謂れはない」し、「有用な眞實が黨派的でないからとて、沈默を強ひられねばならぬ謂れもない」と主張したのであつた。メルヴィルは書いてゐる。

人知で判斷する限り眞實としか思へぬ事實を、隱蔽したり輕視したりするのは止めようではないか。たとへば、相手を激しく彈劾する頗る兄弟愛に悖る悍しさは、長年に亙つて續いて、益々熾烈になつて、つひには流血を招くまでに至つたが、實はその悍しさはお互ひ樣だつた、それが眞實である。（『戰爭詩篇』）

カインとアベルに始る兄弟の憎み合ひは、人類の歷史と共に古くて、我々はみなカインの末裔であり、北部人だけが兄弟愛の權化なんぞであり得る道理はない。實際、開戰に先立ち、北部人も南部人も「兄弟愛に悖る」感情を燃え立たせ、罵言を浴びせ合つたのであり、正しく「お互ひ樣」だつたのだが、勝利に驕る北部人にとつては耳障りなさういふ眞實をメルヴィルは指摘したのである。偏狹で黨派的な北部人はメルヴィルが指摘した次のやうな眞實にさぞ眉を顰めたにさうゐない。

北部の我々が信ずる處からすれば、正道を踏み外した嘆かはしい動機としか思へないとしても、正しくその動機に支へられて、南部の兵士達は己れを捨て鄕土のために實に見事に戰つた。さういふ勇敢な兵士達の思ひ出を、今、南部が弊履の如く打ち捨てて顧みないとしたら、それは南部にとつての不名譽である。

愛國心は卑しむべきものではないし、人間性に悖るものでもない。今年の夏、南部の人々はヴァージニアやジョージアの埋葬地に赴き、家族を失つた悲哀や、誇りに滿ちた愛情で胸を一杯にして、墓前に花を獻じ死者を悼まうとするだらう。また、北部の人々は悲哀や愛情に充ち滿ちた同じやうな捧げ物を携へ、北部の大義に殉じた同胞の墓地に赴くだらう。天の目から見るならば、いづれも尊さの點で何の違ひもありはしない。

勝者たる北部人の一人メルヴィルは、戰爭が終つて後、勝敗といふ「外的事實」を超える大事を沁み沁み考へたのである。「天の目から見るならば」人間はみなカインの末裔でしかない。けれども同時に、自己以外のもののために、鄕土や同胞のために、己れを捨てられる存在でもある。事實、多くの南部人は鄕土を守るべく、壓倒的な戰力差が存在した

にもかかはらず、五年間、頗る勇敢に戰ひ、戰野に屍(しかばね)をさらした。敗れたとは云へ見事ではないか。そしてさういふ見事な同胞を悼む氣持は勝敗にかかはりなく尊いではないか。メルヴィルはかう結んでゐる。

今のやうな時世に、自説を述べるに際して飽くまで公正たらんとする者は、四方八方から劍の切つ先を突きつけられながら歩きまはつてゐる様なものである。

祈らうではないか、この恐るべき悲劇、歴史的な悲劇が、恐怖と憐愍(れんびん)を通して愛する祖國全體を教育する事もなく、過去のものとされて仕舞ふ事のないやうにと。

忘れてならぬ敗者の見事

南部人は敗戰から人間に關する「普遍的な眞實」を學んだとフォークナーは語つたが、勝者たる北部人メルヴィルも、「有用な眞實」を直視せよと主張して、「恐るべき悲劇」の體驗を「愛する祖國全體を教育する」機縁とせよと訴へた。これを要するに、「眞實を追

ふ狩人」の末裔たる點において北部人南部人の別は無かつた譯だが、ソクラテスを先祖に持たぬ我々日本人は、敗戰の經驗を「普遍的な眞實」を學ぶ手懸りとする事もなく、「外的事實」すなはち狀況の奴隷であり續け、「事大打ちこはし思想」も「積極的健忘症」も克服できず、「ゴム人形」の輕佻浮薄を免れない。現に、「ゴム人形」ならざるアメリカ軍の心膽を寒からしめた硫黄島守備隊將兵二萬一千の見事な戰ひぶりは、「弊履の如く打ち捨てて顧み」られぬまま、大多數の日本人の記憶から消え失せたが、それは日本にとつて甚しき不名譽だと、メルヴィルなら云ふであらう。

しかるに、敗者の見事を讃へるメルヴィルの精神は今なほアメリカ人の胸中に生きてゐる。ビル・ロスが『硫黄島―剛勇の遺産』に紹介してゐる、元海兵隊員ジーン・ジョーンズもさういふアメリカ人の一人である。ジョーンズは十代の若さで硫黄島攻略戰に參加し、戰鬪の撮影を擔當し、喉に重傷を負ひ、師團長から感狀を授けられた勇士だが、一九八四年、ロスに書簡を送り、硫黄島攻略戰の感懷を「南北戰爭が終つて生き殘つた兩軍の兵士がそれぞれの胸に抱いた氣持になぞらへ」てかう書いた。

長く悲劇的な戰爭が終つたその日の夕刻、北軍と南軍の兵士達は一緒に集り、食糧

を分ち合ひ、將來について語り合つた。何千もの篝火が血をたつぷり吸ひ込んだ戰場を煌々と照らす中、彼らは至る處に懷しい戰友の顏を見出したにさうゐない。生きてゐる者も死んで倒れてゐる者も、疲弊し切つてゐるものの、決然たる顏附だつた。

これらの兵士達は自ら信ずる事のために、そして同胞のために戰つた。恐るべき戰場に累々たる屍の山を殘して來た彼らではあつたが、その夜はさういふ一切の事どもが價値ある事だつたと心中強く確信してゐたであらう。彼らの多くは戰つてゐる間も、自らが何を爲してゐるのかについて、そしてまた、何故それを爲してゐるのかについてよく理解してゐた。そしてその夜、彼らは自らの試煉の意味と犧牲の價値を見出したのだ。硫黄島についても、正に同じ事を私は思ふ。

ジョーンズは勝者にとつてのみ「累々たる屍の山」を築いた事の「一切が價値ある事」だつたと云つてゐるのではなく、敗者にとつても同樣だと信じてゐる。さう信じてゐて「硫黄島についても、正に同じ事を私は思ふ」と結ぶ。つまり、硫黄島で斃れた日本軍將兵も「自ら信ずる事のために」戰つたのであり、彼らの爲した事は「價値ある事だつた」と、ジョーンズは考へてゐる。さう理解してよいかと問はれたら、ジョーンズはかう答へ

るであらう。無論だとも、「愛國心は卑しむべきものではないし、人間性に悖(もと)るものでもない」、硫黄島の日本軍將兵も、南軍の兵士と同様、敗れたりとは云へ同胞と故國のために命懸けで戰つたのだ、さういふ彼らの「試煉の意味と犠牲の價値」を、一體誰が否定出來るかね。